

創世記15章1-12、17-18節
フィリピの信徒への手紙3章17-4章1節
ルカによる福音書13章31-35節

大齋節も第二主日になりました。昨年の降臨節から改定祈禱書試用版の聖書日課を用いていますが、本日の福音書は少し変化があります。以前は、22から30節、小見出しで「狭い戸口」とある部分が《かっこ》に入って選択可能であったのですが、新しい日課では31から35節の小見出しで「エルサレムのために嘆く」の部分のみになりました。聖書日課の《》を省略する教会も多いので、大きな問題はないといえますが、本日はその箇所も含めて学びます。

31節から35節は、22節に「イエスは町や村を巡って教えながら、エルサレムへと旅を続けられた」とある通り、イエス様が弟子たちとエルサレムに行く旅の途中のお話です。旅の中でいろいろな出来事を描くのがルカ福音書の特徴ですが、その旅の目的地はエルサレムです。それは物理的な旅としての目的地であり、また宣教の旅としての目的地でもあります。「狭い戸口」と題される箇所は、23節の「すると、『主よ、救われる人は少ないのでしょうか』と言う人がいた。イエスは一同に言われた」と始まるのですが、イエス様の最後の答えは、「そこでは、後の人で先になる者があり、先の人で後になる者もある」です。「そこ」とは、「神の国」ですが、それには天のエルサレムというイメージがあるのです。

本日の箇所は、教えの途中で、「ちょうどその時、ファリサイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに言った。『ここを立ち去ってください。ヘロデがあなたを殺そうとしています』」と始まります。多くのお話でイエス様の敵対者であるファリサイ派の人々が、イエス様の心配をしているような描写です。珍しい箇所といえます。ただし、信仰熱心なファリサイ派の人々は、ヘロデ王に対してあまりよく思っていないので、イエス様にそのように伝えたのかもしれない。新約聖書にはヘロデが何人か出てきますが、このヘロデは、ヘロデ・アンティパスです。クリスマス時に登場するヘロデ大王の子です。イエス様が活動した時代に、ガリラヤそしてペレアの領主でした。バプテスマのヨハネの処刑を命じたのもこのヘロデです。このヘロデは領地のヘレニズム化（ギリシア・ローマ文化の受容）を促進したので、信仰熱心な人々からは嫌われたようです。ただし、ルカ福音書にヘロデがイエス様に敵意を持った描写はありません。バプテスマのヨハネの処刑の後、うわさに聞いたイエス様に興味を持ったことは描かれています（ルカ9:9）。

そのヘロデに対して、イエス様は、「行って、あの狐に、『私は今日も明日も三日目も、悪霊を追い出し、癒やしを行うことをやめない』と伝えよ」（ルカ13:22）と「狐」にたとえて批判します。「狐」が悪い譬えに用いられるのは、文化的に共通しているようです。この32節のイエスの伝えよといった部分は、聖書協会共同訳で訳文が変わりました。それまでは「今日も明日も、悪霊を追い出し、病気をいやし、三日目にすべてを終える」でした。また口語訳でも「見よ、わたしはきょうもあすも悪霊を追い出し、また、病気をいやし、そして三日目にわざを終えるであろう」でした。新共同訳、口語訳は、他国語の多くの訳に採用されている文章です。新しい聖書の別訳にも同様の訳文があります。違いは「今日と明日」と「三日目」という部分をどう訳すかです。多くの訳は、それらを別々な事柄として訳しています。おそらく「三日目」という表現に、イエス様の十字架と復活の出来事との結び付けを想定しているのでしょう。しかし、新しい訳は、「今日（一日）」、「明日（二

日)、「三日目」ととらえ、毎日、業を行うという意味に解釈したのでしょうか。それは、次の33節で、「**ともかく、私は、今日も明日も、その次の日も進んで行かねばならない。預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ**」と、最後の言葉が異なりますが「今日も明日も次の日も」とあるからです。いずれにしても、イエス様は、危険があっても業をやめないと宣言しています。そう考えますと、新しい訳の方がふさわしいと思えます。しかし、さらに大切なことがあります。それは、イエス様の旅と宣教には目的地があること、もっと大きな視点でいえば、イエス様がこの地上に現れたことには目的地があるということです。それがエルサレムであること、そしてそこでの死であるということです。これは、ルカ福音書の特色を示した受難予告といえるでしょう。

このあとに続くのは、イエス様のエルサレムに対する嘆きです。イエス様は、自分がエルサレム以外では死なないことだけでなく、そのエルサレムが何度も主なる神様と、そして今、イエス様の呼びかけにも応じなかったことを語ります。「**エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めんどりが雛を羽の下に集めるように、私はお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった**」(ルカ 13:34)とある通りです。それゆえに、イエス様は、主なる神様に選ばれたイスラエルの中心地、エルサレムに救いがないことを嘆いています。それが歴史的なイエス様の意図であったかどうかはわかりませんが、そこまでエルサレムに固執するイエス様を描くことには理由があります。それは、悔い改めてイエス様をキリストと信じたキリスト者が新しいイスラエルであり、その中心地がエルサレムであるというルカ福音書の神学です。地上のエルサレムは、新しいイスラエルの始まりであり、天上のエルサレムは、その最終目的地であること、つまり新しいイスラエルとしての教会は、エルサレムから始まり世界に広がる、そのような歴史観があるのです。

もちろん、エルサレムという場所は、イエス様の時代もその前も、そして今もあります。今はイスラエルという国があり、その首都をどこと考えるかで(つまりテルアビブかエルサレムか)いろいろと問題が生じます。また、教会が地理的・物理的な意味でエルサレムに固執すること(かつての十字軍のように)は、いろいろな意味でおかしいでしょう。あくまで、イエス様の十字架と復活の場所であったエルサレムが、わたしたちにとっての信仰の出発点でありまた目的地であるということです。教会に連なるわたしたちは、新しいイスラエルとして、狭い門から入っている存在であり、また天上のエルサレムに入る存在です。その意味で救いに与る存在です。その意味では何があっても安心してよいのです。

それではこの福音書に描かれている、イエス様のエルサレムへの嘆きをどう捉えるべきでしょうか。過去の他人の出来事でしょうか。そうではありません。わたしは、エルサレムに限らず、この地上に争いや紛争、それに伴う悲しみがある限り、今もイエス様は嘆いておられるととらえることが大切なのです。かつてイエス様は、実際に存在する町、エルサレムを嘆かれたように、主なる神様に立ち返らずに行われる悲劇を嘆いておられるということです。救いの中心であるエルサレムに平和がなければ、それ以外の場所で平和があるはずもないからです。

わたしたちはイエス様の嘆きから、歩むべき道を示されます。イエス様の嘆きは、主なる神様が地上に平和を求めて嘆いておられることを意味します。しかし、わたしたちは、イエス様によって、天のエルサレムに住まいがあるからこそ、まことの平和を望むことができます。その望みを起こさせる大きな鍵となる、イエスの受難を覚えて、日々、祈り、歩んでいきたいと思います。